

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4391300169		
法人名	社会福祉法人グリーンコープ		
事業所名	グループホーム ほのか・豊野		
所在地	熊本県宇城市豊野町糸石3928-1		
自己評価作成日	令和3年3月8日	評価結果市町村受理日	令和5年5月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和5年3月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症対応型共同生活介護事業所として開所し9年目を迎える。もともと、豊野地域において、訪問介護事業を行い、現在も継続して高齢者介護事業に従事している。地域密着型事業所での高齢者の住環境や、独居世帯などの現実的な生活ニーズに精通し、「ご自宅での生活が一番である」という思いを基本に、ご自宅での生活環境の延長上の「生活の場」・「それぞれのご利用者の尊い人生時間をお送りいただける場」をどうあるべきかを、ご入居前の状態から把握し、ケアに活かしている。地域の馴染みの関係の延長上にある共同生活の支援の場であり、顔見知りや親しく集う場でありたいと考えている。このような思いで開所し現在に至っている。在宅生活における介護支援の延長上であることを意識し、それぞれのご利用者様の生活背景を十分把握し、サービスを提供している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設して9年、地域交流室の活用(会議では子どもたちも受入れている)が、賑わいとして入居者の生活の幅を広げ、毎年植える向日葵は入居者の楽しみとともに地域住民への啓発の一環として生かし、人が集う場所としての事業所の存在は、この地に確固たる基盤に繋がっている。ホームとして初めての百寿の祝いや長い入居歴の中で看取りケアへの取り組み等在宅生活の沿線上に捉えたケアを医療・家族・ホーム側が連携しながら支援している。鳥のさえずりが心地よい自然環境のなかで、“ほのか便利”がほのかな入居者の日常を映し出し、職員は否定しない・拒否の無いケアに努め、本人の真意を引き出しながら“今”に注視した最大限のケアに真摯に取り組んでいる。ホームを運営する上で、人がいかに大切であるかを認識し、職員一人ひとりが経営者であるとのスタンスとして、経営状況もオープンにする等透明性のある運営体制である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

### 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所内に掲示しており、職員一人一人に書面でも配布している。基本スタンスを毎日唱和しており、意識づけ、さらには浸透まで目標としている。いつでも確認でき、振り返りができる環境にはなっている。	法人としての基本理念である“共に生きる”を大前提にホームとして「和みの場の提供、その人らしさを大切にする、地域との繋がりを大切にする」を理念に掲げ、年度初めに確認するとともに、日々理念を意識しケアに反映させるとしている。コロナ禍の中で、地域との関係は難しい状況にはあったが、人が集う場所であり、人と接することがホームの理念の一つであるとしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ前は、定期的(2か月に一回)に地域に向けたサロンを開催し、地域との交流の場としていたが、今年度もコロナの影響で開催できなかった。月に一回の清掃活動は継続している。意識は持ち続けている。	コロナ感染症により入居者が地域へ出る機会は少ないが、ホームは地域の一員として回覧板を活用した情報発信や、地域交流室を活用した会議(グリーンコープの組合の委員会)では子どもたちも受け入れており、賑やかさは入居者の生活の幅を広げている。職員は、ホーム周辺のごみ拾いや草取り等自主的に行い、入居者は庭先での散歩等に出て過ごされている。また、地域への啓発の一環としてのひまわりは入居者のみならず住民の目を楽しませている。	例年であれば地域に向けたサロン開催が住民との交流の接点として生かされていたが、コロナ禍の中で中止せざるを得ない状況にあった。コロナ感染症の緩和により再開に向けて再始動されることと大いに期待したい。地域住民のサロンは開催されてきており、まずは職員が参加することを検討頂きたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	サロンは開催できなかったが、運営推進会議にて、日々の支援状況を、地域の方に向けて報告する場を設けている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	1回のみ書面での開催もあったが、他5回は集合開催し、事業所の活動報告や入居者の状況報告をしている。参加者も増え、行政や地域の方からの質問や助言を受けサービス向上に活かしている。	今年度は書面開催が一回、他は通常開催としてサービス実施状況等報告の他、身体拘束等適正化の為の対策を検討する委員会としてホームの状況を説明するとともに、地域との交流・活動の状況、地域への取り組み、地域の困り事、地域交流室の使用など提示しながら意見を聞き取りする態勢としている。また、雑談の中でも、有意義な案件もあると捉え情報を集めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	毎月地域包括支援センターに向けて、施設の入居状況等を報告し、密な連携をとっている。2ヶ月に1回のグループホーム連絡会を開催し、地域の他グループホームとの協力関係を築いている。情報交換の場となっている(本年度は集合開催)	運営推進会議に参加がある包括支援センターとの情報共有や、空室状況を連絡したり、研修案内等情報をリサーチし、行政には加算や変更届等書類提出に定期的に出向き、良好な関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	「緊急性」「一時的」「非代替性」という3つの条件を理解し、身体拘束はしてはいけないという基本スタンスでケアを提供している。運営推進会議と併せて、身体拘束等の適正化のための対策を検討する委員会を開催している。	毎月の会議の中で、虐待防止委員会を開催しスピーチロックの研修を行うと共に、動画で周知を図っている。運営推進会議の中に身体拘束適正化委員会を設置し、人感センサーの使用や虐待問題に関する全職員へのアンケート等を説明している。職員の口調については特に注意喚起し、その時々で声のトーン等常に注意している。入居者によっては外に出たいとの傾向もあるが(新規入居者)、玄関の椅子に座る入居者等一人ひとりの状況を把握し、所在確認を徹底している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月1回の職場会議で虐待防止委員会を開催し、テーマを決め意見交換を行っている。各職員から年に1回アンケートを取り、意識付けとともに、虐待防止に取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人内や外部の研修へ参加する機会を設けている。入居者に後見人制度を利用されている方もおられるで、より認識しやすい状況にある。今後も引き続き関係機関と連携していく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用者や家族へは感染対策を徹底した上で、事前に施設見学をしていただいている。書面で契約書と重要事項を説明しサービス内容や費用等について十分な説明を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見、要望は直接又は電話にて、個別に聞かせて頂いている。昨年度はアンケートを実施し、意見を頂いた。運営推進会議では家族代表の方からも聞かせて頂いており運営に反映させている。意見箱も設置しており匿名での意見、要望も頂けるようにしている。集約し家族会と運営推進会議に報告することとしている。	今年度もコロナにより一時期は家族の面会を中止した時期もあったが、交流室を活用して再開し、家族へのアンケートにより意見を聞き取りし、サービスに反映させている。入居者個々に受診や食事量等1ヶ月の様子及びほのか便りにより情報を開示している。アンケート結果は家族会や運営推進会議で報告することとしているが、家族会は開いていない。	家族は「合いに来たよ」と入居者と対面出来ることを心待ちにされていたようである。家族との交流や家族会が開催できるよう検討いただきたい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職場会議において運営や経営状況の報告をし、職員の意見や提案などを聞く機会がある。職員ひとりひとりが運営にかかわることを意識し、責任をもった運営を心掛けている。必要に応じては個別で面談を行っている。	ホームの現状や経営状況もつまびらかにするとともに、発言も自分に責任を持つとしている。職員会議でケア上の意見等を出し合い、申し送りにより入居者の様子や職員の気づきを出し合いながら状況を共有している。また、運営をする上で人が大切であると捉え、働き方アンケート等により意見を引き出し、個別面談を行う等職員の意見や提案を出す多くの機会を作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の勤務状況、意欲、スキル等総合的に把握し、労働環境や報酬を改善しやりがいを持って仕事が出来るよう努めている。特に職員の意見は必ず取り扱う場を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	全ての職員へ法人内や外部の研修案内を行っている。年度初めに個別の目標を決め、研修が必要な職員へは、受ける事ができるよう勤務に組みこんでいる。今年度は、オンライン研修への対応も出来ている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡会宇城ブロックに加入してネットワークづくりやお互いの事業所との交流はできている。勉強会へは職員も参加できるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期のインテークの段階で幾度もコミュニケーションをとることから始め、早期になじみの関係構築が可能なように生活歴、趣味、家族関係などアセスメントを重要視している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記同様に家族の意見の反映にも重点を置き、出来るだけ正確なニーズの把握に努めている。まずはこまめな連絡などで信頼関係を築くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	「その時」にグループホーム入所の必要のある方に入所して頂き、生活していくうえで必要になった時点でその都度サービスの再検討を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共同生活介護事業であることを念頭に入れ、本人の訴えに耳を傾け、気持ちよく毎日を過ごしていただくよう努力している。できることはしていただき、自分の役割を持ち、共に生活する者同士の関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	パーソンセンタードケアの考えを基本に支援している。本人と家族の関係を良い状態で保ち面会に来やすい環境をつくり介護に家族も参加しているという意識を持っていただいている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご本人が今まで築いてきたネットワークを大切に、昔からの馴染みの方の面会や、外出時には可能な限り本人の希望する場所へのお誘い等配慮を行っている。今年度も外出機会は多くなかった。	入居者個々のバックボーンやこれまで築かれてきた人や特定の物・こだわり、その人が持つ価値観などの違いを把握している。実弟が訪問された際には昔の写真を持参されたり、家族を中心とした訪問、入居されたことでホームでの生活を心配して訪問される兄弟等身内を中心として訪問されている。成人式には晴れ姿の披露にお孫さんが訪問されたケースもある。馴染みの場所への外出は難しい状況にあり、四季折々を感じる為様々に工夫して室内生活を支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	見ず知らずの利用者同士が同じ空間で共同生活をされているので、より良い関わりができるよう席の配置を考慮したり、ときには利用者同士の間を職員が繋ぐなどの配慮を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了時における正確な情報提供や、関係性の継続は、非常に重要と考えており、必要に応じた対応を心掛けている。医療機関への入院となった方には必要な情報をこまめに伝えた。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや意向は、言葉や表情にて確認するよう努めている。本人の意向を家族へ伝え、できる範囲で実現に向かうよう努力している。	職員は入居者に拒否しないことや否定しないケアに取り組み、良く会話を交わしながら思い等を引き出している。発語困難や意思疎通困難等には仕草で推察したり、簡単な言葉や選択できる・自己決定が出来るそのような声を掛け、本人にとってはどうなのか深く探りながら、今やれることを行うとしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	インタビューを繰り返し、出来るだけ正確なアセスメントが出来る様に努めている。その情報を職員全員が共有できるよう、工夫が必要である。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	最低限の基本的な生活リズムを守りつつも、可能な限り、共同の場に参加いただき、それぞれが楽しんで、自身の力を維持出来る様な時間の過ごし方を日々提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的な会議、緊急的な会議等を必要に応じて開催し、本人、家族、時に主治医の意見も取り入れ計画に反映させている。スタッフひとりひとりが参加できる仕組みを構築する。出来ない場合は事前に意見を聞様している。	毎月の会議のなかで、職員から見たケア上の意見等を出し合い、まずは入居により環境に馴染むため、見直すことを前提にした暫定プランを作成している。入居者の希望を聞き取ることは難しいが、本人の言葉をそのまま希望として記載し、家族の意向を基にしたプランを策定している。超高齢化した入居者には健康的な生活の維持や前向きな生活が出来るよう支援することをプラン化し、半年毎に見直しが行われており、現状に即した具体的且つ個別的なプランが作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の変化や、状態の観察が必要な場合、医療機関受診なども含め、個別記録への記載と別に申し送りノート、受診記録などを活用し情報の共有に務めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者のニーズに対して、できないの判断には注意している。実現可能かは別にして、一旦話し合い、臨機応変に対応できるようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	昔ながらのなじみの関係を継続させ、地域ボランティアの協力等地域資源の活用と協力を得られるように努力している。担当だった民生委員より、意見や助言等頂けている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者の健康管理は特に重要であると認識し、その上で、本人と家族の了解と納得の上で適時、医療機関の受診している。常時看護職員を配置し、異常の早期発見に努めている。	かかりつけ医は本人・家族の意向を尊重し、協力医療機関による月2回の訪問診療や希望される医療機関による月1回訪問診療、職員による受診対応が行われている。歯科は必要時に受診を支援している。入居者の健康管理の重要性を認識し、かかりつけ医との連携、看護職員を中心に異常の早期発見に繋げている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業者内の看護師には利用者の健康状態の把握が出来る様に、また、スタッフ全員が情報を共有出来る様に記録、申し送りノートを活用し、適時的確な医療機関の受診と早期対応ができるようにしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の地域連携室との情報交換や、入院時の状態把握の為に定期訪問を行っている。入院～治療～退院時の本人の心的負担を考え、退院後のADL早期回復にも配慮し対応を心掛けている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ターミナルケアに関する指針を契約時に説明している。終末期になった時点で再度説明を行い、本人と家族の思いも十分に受け止め、主治医と共に方針を共有し支援している。今年度も1件看取りを行った。	入居時にホームの指針をもとに終末期支援について説明している。意向についてはその時点では不明であるが、ホームの取組に「それはいいですね」と安心されるようである。昨年長い入居歴の方の看取り支援が行われている。その際、「コロナ禍にあり最期に会えない」など双方が残念な思いをされないよう、他の入居者にも十分配慮して主治医の協力、管理者、職員が思いを一つにして立ち合いの機会が持たれている。支援後は会本人を偲びながら振り返りの機会が持たれている。	管理者はホーム運営に理解のある協力医の存在が心強く感謝を語っている。今後も本人・家族の意向に沿いながら日々の支援が継続されることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	定例の研修にて、緊急時の対応・心肺蘇生法・AEDの使用方法等を取扱い、自分のものとしてできるよう努めている。正確に慌てず出来る様に対応を共有しイメージトレーニングを行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、火災を想定した避難訓練を消防署の協力で行い、職員が利用者を迅速安全な避難誘導と身の安全確保が出来るよう実施している。また、非常災害時の対応マニュアルに地域住民の協力体制も記載、協力依頼もしている。	今年度6月に夜間想定で避難訓練を実施した際はバタバタとしてしまったことが反省にあがっており、2回目は3月に昼想定で予定している。備蓄については災害と感染対応用をリストに沿って確保しており、3月に非常災害時等研修会が行われている。コンセントの埃やベッドの安全チェックなど今後も意識を持って取り組みたいとしている。	1回目の訓練後、訓練ではなく実際に意識して取り組むことが反省としてあがっており、今後活かされることが期待される。今後は自然災害についてもこれまでの災害を風化させることなく、机上を含め訓練に取り組まれることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけが粗雑にならぬように、それぞれの利用者の立場に立った声掛けが出来るよう尊厳とプライバシーに配慮している。職員同士でも気づいた時は直接言い合えるよう、互いに気を付けている。	呼称は苗字を基本としているが反応などから下の名前でも対応している。職員の口調や大きな声など、本人だけではなく周りにも不安や不快になる事など事例をあげながら周知に努めている。個人情報の使用については本人・家族の承諾を得、職員の守秘義務の徹底については研修会の中に入れていた。職員は季節に応じた服装、身だしなみを支援しており、自ら電気カミソリで髭を剃る方、女性入居者の中には髪を櫛でとく方もおられる。	これまで3か月に1度の訪問カットを2ヶ月に1度に変更されることで、髪の毛の伸びが気になる方には嬉しい支援と思われる。家族にも是非伝えて頂きたい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の声にならない気持ちをくみとり、いろんな方法でアプローチを行っている。決して支援者本位にならず、希望の表出や自己決定が出来るよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	スタッフの都合ではなく、利用者本位のケアを最優先に考え、1人ひとり生活のペースが違うのは当たり前であり、可能な限り寄り添って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その季節に合った服装や身だしなみを援助している。衣替えの時期には家族にも協力いただいている。定期的に訪問理容に散髪を依頼し実施している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者に希望の献立を聞いたり作り方の助言を頂いたりしている。それぞれのADLに即した生活活動の中で食事の下準備等、一緒に楽しんで出来ることは、なるべく参加していただけるように配慮している。	入居者の希望や季節感のある献立を立て、専任者を中心に調理が行われている。調理を作る際は食欲のでる盛り付けや汁物におからパウダーを加える等栄養面にも配慮し、「自分の家族や親だったら！」という気持ちで今後も調理に努めたいとしている。入居者の中には盛り付けに「絵に描いたみたいきれいなね〜」と言われる方もおられるようである。入居者の嚥下力に応じた食形態で提供しているが、トロミやキザミ食も増えている現状である。入居者が普段の調理に関わる機会は難しいが、お盆拭きや玉ねぎの皮むき、干し柿作りなどできる事を支援している。	今後も食事担当者会議や入居者と同じものを摂っている夜勤者(夕食)などの気付きを活かして、入居者の楽しみとなる食事支援の継続に期待したい。また食事介助を行う際は、声掛けなど個々のペースに配慮し支援されることを期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者に準じた食事形態や量を考え、介助も過介助にならないように気を付けて行っている。摂取量が少ない時は介助を行ったり、主治医と相談し、栄養補助食品を摂取して頂いている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後に利用者のそれぞれ違った口腔内環境に見合った口腔ケアを行い、健康的な口腔内環境の維持に努めている。口腔ケアハンドブックを活用し日々観察を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来る限り、排泄に対する身体機能維持に務め、尿意、便意の確認と排泄パターンを把握し、出来るだけトイレでの排泄を試みている。	日中はトイレでの排泄を基本とし、殆どの方がリハビリパンツを使用されているが、テープ式オムツや布パンツで過ごされる方もおられる。オムツ使用の方も排便時は2名介助でトイレの使用を支援している。パットの昼・夜の使い分けなど個々に応じて検討し、新人職員を中心におむつの研修(身体介護の中でも)も行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	乳製品や腸内細菌活性飲料の活用等を常日頃から行い、出来るだけ自然排便が出る様に日々努力している。自己排便が困難な方へは主治医へ相談し薬の処方を受け2、3日に1回は排便できるように支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	本人が気持ち良く入浴をするという事を基本とし、毎回のお湯の入れ替えを行い、完全に個別での入浴としている。入浴時間帯はこちらの都合ではなく、本人の希望を伺い、入浴中はリラックスできるよう配慮している。	入浴は週2回午前中が中心であるが希望や状況に応じ午後からも支援し、浴槽をまたぐことが困難な方はリフト浴で浸かられている。職員と1対1で、毎回湯を入れ替え一番風呂を味わう事が出来ている。拒否をされる方には曜日を変更し、基本的に月曜から土曜を入浴日としているが日曜日も対応し、週1~2回の支援に努めている。冬至には職員が持ち寄った柚子を浮かべ季節湯を楽しんでいる。シャンプー類はホームで準備しているが、個別で洗顔フォームを用意される方もおられる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	基本的な生活リズムは守りつつも、それぞれの体調や気分に合わせてという事を重視し安眠や休息が出来るよう個別の対応を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬情報をスタッフ全員が把握し、薬説明書も最新のもので介護現場で確認出来る様にしている。月1回の職場会議で看護師から服薬についての説明を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中で、それぞれの方が楽しんで時間を過ごしていただけるよう、得意な事・好きな事等伺いながら支援している。コーヒー紅茶、甘いものなど嗜好品の把握をして気分転換を行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	近隣や敷地内を散歩し季節感を味わうことが出来ている。人が多いところへはいけませんが、今後は家族や近隣の方への協力も含め、外出の機会を作っていきたい。	鳥の鳴き声や樹木の開花など季節を感じながら過ごせる環境であり、日光浴を兼ねた敷地内の散歩は継続して取り組んでいる。またテラスを活用した女子会(女性利用者同士のお茶会)、豊野花火大会も見学できている。町周辺の車窓ドライブは個別支援で行われている。入居者と蒔いたひまわりの種は昨夏も見事に開花しており、暑い時期であり短時間ではあったが花見学を楽しんでいる。	今後は家族を含め近隣の協力を得ながら、外出の機会を作っていきたいとしており取組が期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には金銭管理は事業所で行っている。本人の希望で欲しいものなどは購入するようにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの依頼がある時はいつでも電話をかける支援を行っている。手紙が届いた時は本人へ渡し必要な方へは読む支援を行っている。何か知らせて欲しいと言われる時は代わりに伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は大切なプライベート空間、その他の共有スペースも重要な生活空間であると認識し、換気や温度湿度調節を行い居心地の良い環境づくりをしている。毎月、ホールの壁に季節を感じられるように装飾したり、季節の花を飾るようにしている。	共用空間はコロナ禍にあり特に掃除や換気、必要な消毒を徹底するとともに、入居者にとって居心地の良い空間となるよう温度やテレビの音量に配慮している。食事やテレビを見たり日中の活動の場であるリビングの席は入居者の身体や介護状況に応じて決定している。新聞を見る事を日課とする方や食後のうたた寝などゆっくり自分の時間を過ごされている。庭に続くテラスは日光浴の場所となる他、コロナ禍では家族との面会の場所になっている。	新年度の運営推進会議でメンバーにホーム内の見学を予定している。今後も定期的な取組により共用空間の整備に活かされることを期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	広い共用スペース内においても、個々の思いやその時々のお気持ちに合わせご本人の思いにあった座席の配置等、考慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内での環境として自分の使い慣れた家具や装飾品の持ち込みを積極的に進めており、テレビなど電化製品も置き、ご本人が少しでも落ち着ける空間作りにも努めている。床に布団が寝やすい方にはそのようにしている。	居室には何でも持ち込んでよいことを伝えており、昨秋入居予定の方には感染症に配慮し、参考までに他の部屋を見てもらっている。居室にはベッドが備わっているが、床に布団敷きが落ち着かれる方には布団での就寝を支援している。使い慣れた家具などの持ち込みを積極的に伝えており、テレビを部屋に置き歌謡ショーや連続ドラマなどを楽しませているようである。	コロナ禍にあり居室での様子が気になる家族もおられるようである。日々の掃除や換気その他、天候の良い日に行う布団の日光干しなども写真を付けて広報誌などで発信することも安心につながると思われる。また、感染症の状況をみながら家族も一緒に居室の環境整備に取り組まれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	生活機能レベルの維持と改善を重要視した対応は、日常生活を送るうえで非常に重要と考え、手すりや椅子などを適した場所で利用する事により本人が安全安楽に自立動作を行えるような環境づくりを行っている。		